

授業記録見取り研修会 (一部抜粋)

〈柴田先生〉

授業記録に基づく授業分析のススメについて。ここで言う授業分析は授業評価とは違う。授業がよかったのか悪かったのかということの評価するための授業分析ではなく、「学ぶ」ということが大事である。授業記録を作成することの意義は、子どもの発言の背景や真の意図、他の発言との関連、授業展開の別の可能性、教師の出の影響など、授業を深く考察するきっかけとなることである。授業に対する洞察力を高めることが大事である。今日もいろいろな共有をしたが、一つの事実でいろいろな見方ができ、それを学び合うことが大事。洞察力を高めるための教材として、授業記録を使うのがよい。全ての発言を頭の中に入れるのは難しいので、大事なところに線をひく、2つの発言をつなぐ、ある子の発言だけをつなげて考えてみるなど、自分なりの工夫ができる。ビデオだと流れてしまい、ライブだと消えてしまう。それを止めて関連づけて考えることができる授業記録は大切である。

授業記録を読む3段階について。記録の意味は、記録を通して事実を知ることである。ただ事実を知るだけでなく、自らの授業観に照らして授業で起きた事実を解釈して評価することが大事である。さらに言うと、授業で起きた事実の解釈から自らの授業観を豊かにすることができるとおもしろい。自分の見方、考え方が更新されていくことが大事である。授業像の更新が起きるところまでいくとおもしろい。研究仮説から使えそうな授業記録がないか探して貼るのもいいが、それは二つ目で終わっている。仕事として研究はできるが、自分の足しにできるのは3つ目である。

これらを実現するために、「身体を介した理解」というものがある。大学では時間に余裕があるので、授業記録を音読している。読むたびに発見がある。声を出すとその子の気持ちに近づくことができる。文章をより深く理解し、内面化するために音読は大事である。

また、授業記録を深く読むためには視点を持つことが大事である。授業の優劣を評価するために授業記録を読むわけではなく、自分が学ぶために授業記録を読む。視点は自分で構成するものである。こういう視点で読むとよいというものを参考にしてもよい。また、記録をさらっと読まず、何度も読み返したり、後戻りしたりしながら読んでいくことや、前のことと関連付けながら後ろを読むことが大事である。つまり、記録と対話するということである。

それから、シミュレーションするという。例えば、教師の発問が出てきたら、教師の発問に対して、子どもがどんな答えを言うか、この子ならどう考えるか、自分が授業したらどう出るのか、出ないのかを考えてみる。シミュレーションをすると、授業展開の別の可能性が見えてくる。別の可能性を探るということは一つの出来事が多様な意味を持ちうるということである。授業の辿った筋道は唯一だが場合によっては違う展開の可能性があったということ。さらには問いを立てるということ。なぜここでこういうことを言ったのかと自分と関わらせながら授業記録を読むのが大事である。

ただし、前提として共感的理解、授業者や生徒のことを尊重するのが大事である。「自分ならこうする」が強くなると「ここではこうすべき」「こうすべきなのに、こうなってないのはおかしい」と断定的な切り捨てになってしまう。これは我々の思考を止めてしまう。評価はするが思考が止まるので、代案を出すのも大事だが、まずは謙虚に学ぶ、事実から学ぶのが重要である。今ある現実、今ある目の前の出来事は、数ある選択の積み重ねの中から偶然そうなのであって、それが絶対ではなく変わりうるものである。ただし、逆に言うと、何らかの要因で、今、目の前にある事実、出来事はそうならざるを得ない必然性をもっている。だから、「おかしいかもしれないけど、そうある」ということ自体を謙虚に受け止めることが大事である。今、目の前にある子どもの姿は、「もっとこうなってほしい」と、理想の姿ではない。また本人も今の自分の姿に満足していない。では、今の姿はあってはならないかというところではない。今そうならざるを得ない今があることを受容することから始めていく。授業しながら幅で捉える。教育は、理想があるので、理想から見てできていないとなるため、現状は常にマイナスに捉えがちになってしまう。必然性をもって謙虚に学ぶのが大事である。ただ、「この子はこうだから仕方ない」と現状を受け入れすぎると良くない。「いつもできないから、仕方ない」「この子はこういう子だから」と一見理解しているようでありながら、その子を見捨

ている。どうしたらその子をもっと伸びるかは、今の姿とありたい姿で幅をもって、子どもを理解することが、共感的に捉えるということである。そこにあるものをそのまま理解する。

最後は、他者との対話を通して学ぶということ。授業は教材を通した子ども同士の学び。授業検討会授業研究会は、子どもの学びの姿を教材にした学び合いである。異質性は大事である。

<質疑応答>

・授業記録を読むと、子どもの心の内面が表れる発言というのはどういうところなのか考えることができる。また、研究会のテープ起こしで実際に打ってみると、先生方が言いたいことが分かり、自分が考えるためのものになる。例えば、授業記録を見取って論文を書くときに、絶対的な術というのはないかもしれないが、研究をする中で得られた、視点をもって見るための知恵のようなものがあれば教えていただきたい

いい子どもの学びの姿と出会うことと、そこへの気づきがある。出会いと気づきの真ん中に洞察力、見取る力がある。それを伸ばしていくことは我々の課題であり、積み重ねである。優れた先人はたくさんいて、愛教大の下田先生は、すごいと思う見取りをするが、占いをしているわけではなく、自分の経験から子どもを見取る力をつけている。その道で自分が力をつけていくのが大事であるが、だからといって闇雲にやればいいいわけではなく、そこに何らかのコツはある。それは、声に出して読んでみることや、ビデオから発言の間合いを見取ること、言っている言葉そのものではなく、周辺にある言葉に注目することが大切である。「また変な別の実験とか」の言い淀みの中にあるものは何なのか。自信をもって言っているわけではないが、なんとか言ってほしいというその子の願いや不安や心の動きがあらわれている。そういうところを大事にしていく。

また、日々先生は板書の仕方も指導していた。「もっともっと大きくなる」という発言の「大きくなる」という部分を板書したが、その子の「もっともっと」を書いたほうがよいと言われた。「もっともっと」というところに、その子の思考の最前線が表れる。「賛成か反対か」など幹にある部分は見取りやすいが、その子の思考の動きや揺れは、枝葉のところに表れる。最後に論文にしようとする、研究の目的やねらいの流れの中にあるので探さないといけないこともあるが、探すと自分の都合のよいように使ってしまうことになるので時間をおいて見るのが大事である。卒論での経験談。授業記録以外の部分は完成した状態で論文を作っていて授業を見たら、思った通りの展開にならなかったから、別の実践でやり直すことになった。数ヶ月後、もう1回見直したら、全然ダメだと思っていた中で子どもがいろいろな多様な学びをしていることが分かった。典型的に使える授業記録を探していたが、よく見たら子どもが体験を通して見つけ出すための様々な活動をしていた。こちらの意図性が強いと見えにくくなるということもあるため、枠組みをもって書くことと、子どもの学びそのものから学ぶことのバランスが大事である。